

# メキシコ市の

## 都市拡大と その人口動態

相原好江

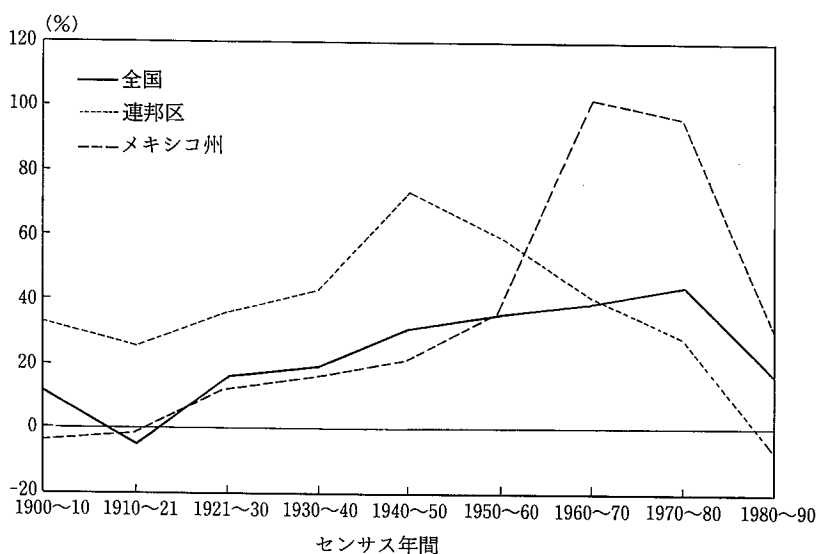
はじめに

1900年、首都メキシコ市を有する連邦区(Distrito Federal; D.F.)の人口は54万1516人で、これは総人口のおよそ4%を占めるのみであった。しかしその後10年からの数年間のメキシコ革命による総人口の減少期を経て、20年からメキシコは人口増加期に入った。これに呼応するように連邦区の人口増加も激しくなり、10年に1度実施される国勢調査<sup>\*1</sup>の結果によると連邦区の人口は、21年には1900年の67%増の90万3063人に、そして30年には100万人を突破し122万576人に増加した。その後も人口増加の勢いは益々強まり、40年には170万人を超え、総人口の9%ちかくを占めるに至った。そして50年、連邦区の人口増加率はピークを迎え、73.6%の人口増加を記録して300万人台に達し、総人口における割合も初めて10%を超え、11.8%を占めるに至った。このような人口増加の激しさはその後も維持されるが、70年代に入り、その激しさに陰



コロンブスの到達500周年の日(1992年10月12日)に、メキシコ市のソカロ(中心広場)に集まった先住民族代表(筆者撮影)

第1図 センサス年間の人口増加率



(出所) 各センサス報告書に基づき作図。

りが見え始め、70～80年においては人口の絶対数は増加しているものの、人口増加率は急激な減少期に入っていく。

こうした連邦区の人口増加の変動過程に大きな影響を与えてきたのが、連邦区の北部周辺を取り囲むメキシコ州の諸市である。第1図でも明らかなように、それまで激しく成長していた連邦区の人口増加率が減少傾向を示し始める1950年代から連邦区に隣接するメキシコ州の著しい人口増加が始まり、60～70年期には連邦区とメキシコ州の人口増加率の動きが完全に逆方向となり交差した。こうしてメキシコ州の人口増加率は、連邦区のそれを大きく引き離し、60～70年期には102%、70～80年期には96%と2期間100%前後の増加率を維持する。しかしこの動きも80年代に入り、連邦区の後を追うように急激なる減少期を迎える。

このように首都をかかえる連邦区およびこれと隣接するメキシコ州における急激な人口増加は、

これら2地域の人口の自然増はもとより、地方から都市(主に首都)およびその周辺地域への人口流入によるところが大である。なぜならメキシコでは1940年から始まった輸入代替工業化政策の進展により、主要都市およびその周辺地域での著しい労働需要が起り、今までにない人口の移動(労働移動)が開始されたからである。これらの移動人口の主たる送り出し地域は土地のやせた、そして旧来の農業技術に甘んじてきた貧しい農村地域である。首都連邦区およびその周辺都市はこれらの人口移動の波をまともに受け、全国からの人口の吸収地としての役割を果たすこととなった。

そこでここでは、こうした状況を踏まえて、連邦区が著しい人口増加期に入った1940年代から最新の90年までを対象として、首都メキシコ市の人口増加の推移を追う。なお筆者の目的は、首都メキシコ市の人口増加の推移とともに、世界的な大都市圏であるメキシコ市大都市圏 (Area Metro-

politana de Ciudad de México)形成に大きな役割を担った連邦区に隣接するメキシコ州におけるメキシコ大都市圏構成諸市の人口増加の推移を追い、さらにこれら地域の人口増加に大きなインパクトを与えたメキシコの国内人口移動の推移を考察し、これにより発展途上国における人口移動により引き起こされる首都の首位性の地理的拡大過程を明らかにすることにあつた。しかし紙幅の制約により、ここでは目的の入り口である首都メキシコ市の人口増加の推移のみを紹介するにとどまっている。

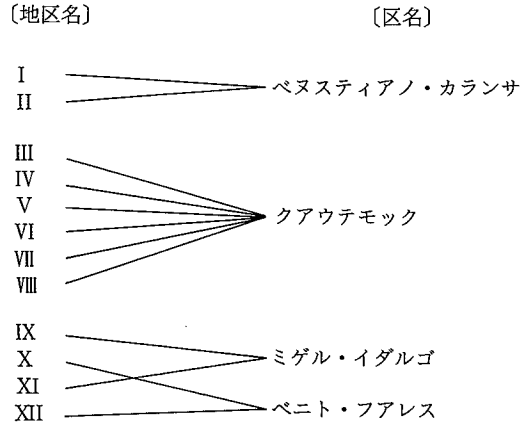
\*1 メキシコの国勢調査(人口センサス)は1895年を第1回として、その後1900年よりほぼ10年ごと、末尾に0のつく年に実施されてきている。ただし20年に実施予定であつたセンサスのみメキシコ革命等の影響により1年ずれこんで21年となった。最新は90年実施のものである。

## 1 メキシコ市の地理的位置づけ

1940年の国勢調査結果報告によると、連邦区は12の地区(Cuartel)から成るメキシコ市とこれを取り囲む12の区(Delegación)から構成されていた。この12の区とはアスカポトサルコ区、コヨアカン区、グスタボ・A・マドロ区、イスタカルコ区、アルバロ・オブregon区、マグダレナ・コントレラス区、人口規模はいまだ小さい地区であるイスタパラパ区、クアヒマルパ区、トラルパン区、ソチミルコ区、トラウアク区そしてミルバ・アルタ区である。

この連邦区の地域区分は1950年、60年そして70年までの国勢調査結果報告書において使用されてきた。しかしその後、70年12月29日に発効した連邦区新組織法により、12地区から成るメキシコ市はここで改めて四つの行政区分(ベヌスティアノ・カランサ区、クアウテモック区、ミゲル・イダルゴ区、

第2図 メキシコ市の再編

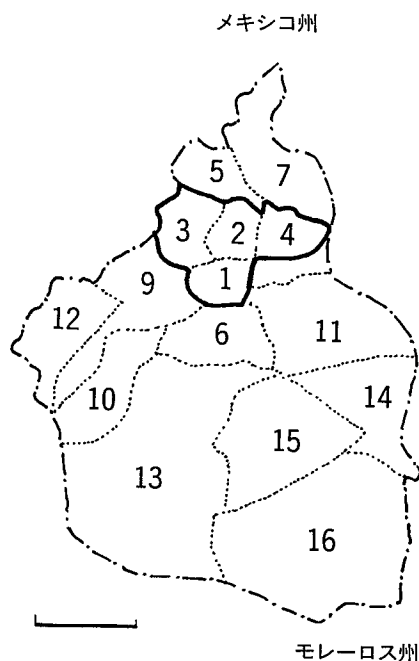


(出所) センサス報告書に基づき作図。

ベニト・フアレス区)に統合された。これによりメキシコ市は中央統計局実施の国勢調査報告書等の統計上の地域区分からは姿を消すことになる。しかし新組織法は同時に、メキシコ市は連邦区そのものを代表すると規定しているので、70年の新法発効前のメキシコ市が連邦区の一区域であつたものが、新法発効後はメキシコ市は連邦区そのものを指すことになる\*2。ただし本稿では以降において便宜上メキシコ市を旧来のメキシコ市の概念で使用する。これにより80年実施の国勢調査報告書より、12の地区からなつていたメキシコ市は四つの区として数字が計上されている。つまり地区IおよびIIがベヌスティアノ・カランサ区に、地区IIIからVIIIまでがクアウテモック区に、地域IXおよびXIが、ミゲル・イダルゴ区に、そして地区XおよびXIIがベニト・フアレス区にそれぞれ組込まれた(第2図参照)。よつて70年までの国勢調査報告書からのこれら新たな四つの区の人口を割り出すにはそれぞれの地区の数字を加算する必要がある。

これにより現連邦区は、従来の12区に新たに再編された4区を加えた、16区からの構成となつて

第3図 連邦区の行政区分



(注) 太線内は旧メキシコ市。

〔区名〕

1. ベニト・フアレス
2. クアウテモック
3. ミゲル・イダルゴ
4. ベヌスティアノ・カランサ
5. アスカポトサルコ
6. コヨアカン
7. グスタボ・A・マデロ
8. イスタカルコ
9. アルバロ・オブregon
10. マグダレナ・コントレラス
11. イスタパラパ
12. クアヒマルパ
13. トラルパン
14. トラウアク
15. ソチミルコ
16. ミルバ・アルタ

いる(第3図参照)。

\*2 公式にはメキシコの首都は連邦区、連邦区の首都はメキシコ市である。

## 2 メキシコ市の地理的拡大

連邦区の中心地域(メキシコ市)における人口増加の過程は、その程度が増すにつれて本来の中心地域からこの地域を取り巻く周縁地域に、さらに行政区分の異なる地域へと地理的拡大を生み出し、近隣諸地域に大きな影響を与える。そこでここに人口増加によりひきおこされたメキシコ市の地域的拡大過程を論ずる際の範囲について概観する。

(1) 中心地域(Ciudad Central)——1970年まで

の12地区からなるメキシコ市、あるいは現在のベヌスティアノ・カランサ、クアウテモック、ミゲル・イダルゴ、そしてベニト・フアレス4区から成る地域。

(2) 連邦区(Distrito Federal)——現在の16区から成る地域。

(3) メキシコ市都市地域(Area Urbana de Ciudad de México)——中心地域および、これらに隣接する地域で、これら地域は建造物や住宅および非農業開拓地域であり、都市開発地として使用されない森林、畑地や河川等が位置するところまでの地理的連続地域である。よってこれら地域は行政区分とは異なる。

(4) メキシコ市大都市圏(Area Metropolitana de

Ciudad de México)——中心地域および、これらに隣接する行政区域で、都市的特性を有し、雇用者、非農業従事者の居住地として、中央地域と社会的・経済的に直接あるいは日常的に密接な関係を有している地域から成る。

### 3 メキシコ市大都市圏の地理的拡大の推移

上記(4)にいうメキシコ市大都市圏の地理的拡大過程を1940年から最近まで追ってみると以下のようになる。

#### 1. 1940年

12地区から成るメキシコ市、および連邦区を構成する残り12区のうち6区(アスカポトサルコ、コヨアカン、グスタボ・A・マデロ、イスタカルコ、アルバロ・オブregon、そしてマグダレナ・コントレラス諸区)から成り、メキシコ市大都市圏はいまだ連邦区内に止まっていた。

#### 2. 1950年

1940年における地域は、さらにコヨアカンとイスタカルコ両区に隣接するイスタパラパ区に広がるとともに、連邦区の北東部のアスカポトサルコとグスタボ・A・マデロ両区に隣接するメキシコ州のトラルネパントラ市へと拡大していく。この結果、トラルネパントラ市はメキシコ州の第1号市として、メキシコ市大都市圏へ組み込まれていく。これを契機に連邦区の人口増大の受け皿としてメキシコ州諸市の役割が強まっていく。

#### 3. 1960年

著しい地域拡大の波は強まり、連邦区の3区、クワヒマルパ区、トラルパン区、そしてソチミル

コ区を組み込みながら、メキシコ州の3市、エカテペック、ナウカルパン、そしてチマルウアカンへと広がっていく。

#### 4. 1970年

この期にはメキシコ市大都市圏は連邦区のミルパ・アルタ区を除く他の全ての区域に拡大するとともに、メキシコ州の七つの市(ラ・パス、アティサパン・デ・サラゴサ、ツルティトラン、コアカルコ、クアウティトラン、ウイスキルカン、ネサワルコヨトル)に及ぶ。なおネサワルコヨトル市は1964年に、チマルウアカン、テスココおよびエカテペックの3市の一部から分離、誕生した。

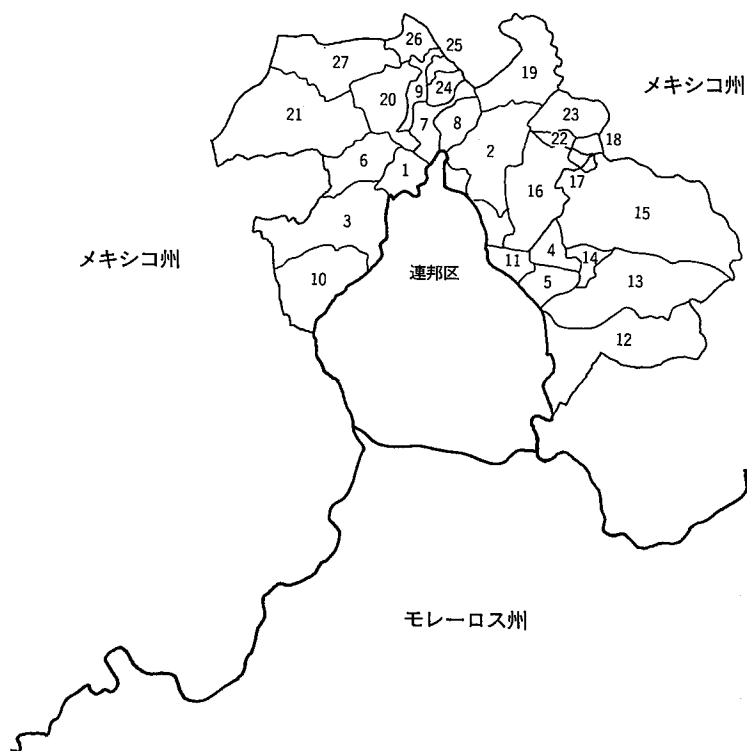
#### 5. 1980年

メキシコ市を構成していた12の地区が新たに四つの区に再編されたことと、連邦区の最後の区として残されていたミルパ・アルタ区がメキシコ市大都市圏に組み込まれたことにより、ここで初めて連邦区16区全域がメキシコ市大都市圏に入った。同様にメキシコ市大都市圏に組み込まれたメキシコ州の諸市の数はさらに増加し、10市(チャルコ、イスタパルカ、チコロアパン、テスココ、アテンコ、チコンクアック、チアウトラ、テカマック、クアウティトラン・イスカリ、ニコラス・ロメロ)が新たに加わった。

#### 6. 1990年

メキシコ市大都市圏は1990年に至って連邦区全域および、メキシコ州の新たな6市(テソウカ、アコルマン、ツルテペック、メルチョール・オカンポ、テオロウカン、テポソトラン)を加えた、メキシコ州の27市を包み込むまでに拡大した(第4図参照)。これによりメキシコ市大都市圏の総人口は、連邦区16区の総人口823万5744人とメキシコ州27市の総人口

第4図 メキシコ州のメキシコ市大都市圏構成都市(1990年)



- 市名 (編入年)
1. トラルネバントラ (1950年)
  2. エカテペック (1960年)
  3. ナウカルパン (同)
  4. チマルウアカン (同)
  5. ラ・パス (1970年)
  6. アティサパン・デ・サラゴサ (同)
  7. ツルティトラン (同)
  8. コアカルコ (同)
  9. クアウティトラン (同)
  10. ウィスキルカン (同)
  11. ネサワルコヨトル (同)
  12. チャルコ (1980年)
  13. イスタバルカ (同)
  14. チコロアパン (同)
  15. テスココ (同)
  16. アテンコ (同)
  17. チコンクアック (同)
  18. チアウトラ (同)
  19. テカマック (同)
  20. クアウティトラン・イスカリ (同)
  21. ニコラス・ロメロ (同)
  22. テソウカ (1990年)
  23. アコルマン (同)
  24. ツルテベック (同)
  25. メルチョール・オカンボ (同)
  26. テオロウカン (同)
  27. テボソトラン (同)

674万8244人を合わせた1498万3988人に到達した。その上このメキシコ市大都市圏の地域的拡大が隣のメキシコ州の州都である82万7000人を抱えるトルカ市大都市圏の地理的範囲に接合するのは時間の問題とされており、2000年にはメキシコ・トルカ巨大複合都市(Conglomeración Megalopolitana)の出現が予測されている。

#### 4 メキシコ市の人口増加の推移

1900年メキシコ市の人口は34万4721人で連邦区総人口のおよそ64%近くを占めていた。その後メ

キシコ市の人口は著しい勢いで増え続け、30年には100万人台を突破して連邦区総人口の84%に迫った。ちなみに1平方キロメートル当りの人口は7470.55人と1900年のおよそ3倍に増加した。これは連邦区全体の人口密度(829.11)の9倍であり、完全な飽和状態に入った。40年メキシコ市が大都市圏形成を開始した時、メキシコ市は大都市圏の人口のほぼ88%を占めていた。その後50~60年においてもメキシコ市の人口増加は続き、60年には人口密度は2万人を超えた。しかしながらメキシコ市の連邦区に占める人口比率は30~40年をピークとして徐々に減少傾向に入っていると同時に、メキシコ市大都市圏に占める割合も40年を境に著し

第1表 連邦区およびメキシコ市大都市圏におけるメキシコ市の人口比率

	(%)					
	1940	1950	1960	1970	1980	1990
連邦区におけるメキシコ市人口	82.39	73.73	58.14	42.23	29.39	23.45
メキシコ市大都市圏におけるメキシコ市人口	88.05	71.73	52.63	31.52	18.00	12.89

(出所) 各センサス結果より作成。

く縮小している(第1表参照)。こうしたことから40年頃までの連邦区での人口増加は主にメキシコ市への集中的人口流入により引き起こされていたことがわかる。その後、人口の流入は飽和状態に直面していたメキシコ市から周辺区や近隣諸市へと向うという人口の地域的拡散がおこったことにより、メキシコ市における人口は80年、90年ともに減少を示している。そこで次にメキシコ市を中心とした連邦区の各区の人口変動の推移を追い、メキシコ市における人口の集中、緩和そして減少への過程にみる各区の係わりを概観する。

## 5 連邦区の人口の推移

### 1. 1940年

連邦区の人口およそ176万人のうち、メキシコ市はその82%強の145万人を占めており、これは連邦区総面積136平方キロメートルのおよそ9%に連邦区総人口の8割を上回る人口が集中していたことを示し、よって残りの人口18%の31万人弱がメキシコ市を取り巻く連邦区を構成する12区に拡散していた。

### 2. 1950年

1940年に比して連邦区の人口は、74%増の305万人に到達、同様にメキシコ市の人口も55%増の225

万人に達した。これらの増加はメキシコ市を構成する四つの区全域で増加しており、特にベント・フアレス区(117.8%増)およびミゲル・イダルゴ区での増加が顕著である。同じく、他の12区のうち、グスタボ・A・マデロ区(393%増)およびアスカポトサルコ(およそ200%増)において増加率が激しく、以後の人口集中地区としての息吹を感じさせている。またオブレゴン区、そして人口数がいまだに少ないイスタカルコ区、コヨアカン区でも著しい増加傾向がみられた。ちなみに50年における12区の人口はおよそ82万人で連邦区総人口の26%に増加した。

### 3. 1960年

この頃から連邦区の人口増加率が1950年に比べて60%と少し弱まり始めたが、実数では182万人増を計上した。人口の増加率の減少は特にメキシコ市でみられ、ベント・フアレス区(前期の117.8%から51.7%に縮小)およびミゲル・イダルゴ区(83.4%から41.3%に低下。しかし実数では19万人の増加をみ、当区最高の66万人に達した)および、ベヌスティアノ・カランサ区(59.5%から20.8%に減少)の3区では人口増加率が半分に低下した。また4区の中で最大の人口を抱えていたクアウテモック区(50年には93.5万人)でも、60年には1桁(4.8%)の伸びにとどまった。このようなメキシコ市4区の人口増加率の低下は他の12区での人口増加に跳ね返った。この期12区

の人口は200万人(連邦区総人口の約42%)を突破しており、メキシコ市の人口282万人に迫ってきている。また50年には12区で20万人口を抱えていた区はグスタボ・A・マデロ区のみであったのが、60年には19.8万人を有するイスタカルコ区を含めると5区に増加した。特に40年代から急激な人口増加を経験してきているグスタボ・A・マデロ区(58万人に迫った)とアスカポトサルコ区(37万人)での人口の膨脹ぶりは著しい。これを追って、イスタパラパ区(25万人)、オブregon区(22万人)が人口吸収地域になっている。

#### 4. 1970年

この期に入り、さらにメキシコ市の人口増加率の縮小は加速し、ミゲル・イダルゴおよびクアウテモック両区ではマイナスとなった。他方、残り2区では増加率そのものは小幅であったが、ベヌスティアノ・カランサ区では19%増を見て、これまで4区で最大の人口を抱えていたクアウテモック区の人口(85万人)を抜いて当区最大の人口の89万人に達した。同様に13%の増加率を得たベニト・フアレス区も50万地区に到達した。この結果メキシコ市の人口は連邦区総人口において50%を割り、42%(290万人強)に減少した。これに対して、他の12区の人口総数は連邦区総人口の58%近くを占めるに至った。特にグスタボ・A・マデロ区は他の区を大きく引き離して増大し、メキシコ市4区においても経験しなかった100万地区に突入した。さらに他の5区もこれを追い、アスカポトサルコおよびイスタパラパ両区が50万地区に、イスタカルコ、オブregon両区も40万人を優に超え、50万地区に迫っている。またコヨアカン区も持続的増加率を示し、35万地区に近づいている。こうしてメキシコ市での人口増加率の減少を補うかのように、周辺地区での人口増加がその激しさを増すなか、1940

年に連邦区総人口の82%(145万人)近くを占めていたメキシコ市の人口もこの期をピーク(290万人)にして減少期へと向かう。

#### 5. 1980年

前期でマイナス成長を示したメキシコ市の2区に加え、今期はベニト・フアレス区でわずかな人口増(4万3319人)をみた他は、3区でマイナス成長となった。これにより人口実数の減少が地域的規模で始まったことがわかる。そしてこの反動は他の12区での人口増加の絶頂期となって現れた。新たにイスタパラパ区が120万地区として誕生し、アスカポトサルコ、オブregon、コヨアカン諸区が60万地区へ、これにイスタカルコ、トラルパン両区が続き、これまでのメキシコ市への人口の地域的偏りが、この期に入り、横並びの方向を示し始めたのがはっきり見てとれる。これによりメキシコ市の人口は連邦区総人口(883万)においてわずか18%の259万人を占めるのみとなったのに比して、他の12区の総人口623万人が連邦区に占める割合は、1940年のメキシコ市のそれとほぼ等しく、40年間で中央地域と周辺地域の人口分布が逆転したことになる。

#### 6. 1990年

1970年期から始まったメキシコ市の人口増加率の減少傾向は、この期に入り4区全域にわたり、80年まで辛うじてプラスを維持してきたベニト・フアレス区も25%減となり、この結果メキシコ市4区全域が25~26%の減少となった。これによりメキシコ市各区の人口も40万~60万の人口規模に一樣化した。一方、80年に最高期に達した他の12区でも、150万地区であったグスタボ・A・マデロ区で16%の縮小をみ、120万人台に減少した。さらに前期に60万地区になったオブregon区もマイナ



スには至らなかったものの、ほぼ横ばいの増加率となった。同様にコヨアカン区も10%以下の増加率にとどまった。こうした大きな人口を抱えた地域での人口増加率の減少の中で、増加率の伸びが見られたのがイスタパラパ区で、18%増により149万に到達し、連邦区で最大の人口を抱える地区となった。

こうして1990年には、40年以降60年まで連邦区における人口の過半数を占めていたメキシコ市も、60年以降は周辺地域での人口吸収、主にグスタボ・A・マデロ、イスタパラパ、アスカポトサルコ、オブレゴン、コヨアカン、およびイスタカルコ諸区での人口吸収により連邦区におけるその割合が低下し、特に70年以降は周辺12区に取って代わられた。しかしこうした中央地域から周辺地域への人口の拡散傾向も90年には変化の兆しが現われ、中央地域人口を著しく吸収してきた周辺12区にも人口減少の波が立ち始める。このことは連邦区と隣接するメキシコ州諸市への人口の拡散と大きな関連があると思われる。なぜならばメキシコ市の人口減少は必ずしも連邦区の他の12区のみへの人口吸収で解決されたとは思われず、前述のメキシコ市大都市圏の地理的拡大の推移で見たように、連邦区北部地域と隣接するメキシコ州の諸市での人口吸収が考えられるからである。しかしこれらメキシコ市および連邦区12区の人口の減少傾向に大きな関わりをもった『メキシコ市大都市圏を構成するメキシコ州諸市の人口の推移』については『はじめに』で述べたように紙幅の制約上、ここでは割愛する。

### おわりに —— 1980年国勢調査結果の怪 ——

1980年6月4日、メキシコにおいて第10回国勢調査が実施された。この結果報告書(州別)は2年後の82年より徐々に出版され、85年9月19日、メキシコ市を襲ったマグニチュード8.1の大地震前にはほぼ出揃った。しかしこの大地震で中央統計局は建物に大きな被害をうけ、この80年国勢調査関係の資料およびデータの入力された磁気テープの大半を失ったという。そうしてこれら磁気テープの回復に四苦八苦しているうちに次回調査に入ってしまったのである。

ところで1980年代10年間はラテンアメリカにとって「失われた10年」と言われた。もしそれが事実なら、メキシコはさらにこの大地震で国家政策への大切な部分をも消失させてしまったことになる。しかしである。90年3月12日、第11回国勢調査が実施され、「失われた10年」を代表したこれら結果報告を関係者は心待ちしていた。幸にもここ数年のコンピュータの普及および技術革新のおかげで、政府は早くも実施から4カ月後の90年7月、国勢調査の予備報告書を発表した。異例の迅速さに浮足だったのもつかの間、なぜか公表数字に煙りが立った。それもそのはず、公表されたメキシコ市大都市圏の概算人口(およそ1500万人)が、87年に国連が80年国勢調査結果数字にもとづき推定、公表した2000年のメキシコ市大都市圏の人口2582万人のそれとはあまりに乖離していたのである。そこで関係者の疑問は国連がベースとして使用した80年国勢調査結果数字に向けられたのである。そこで問題が噴き出した。現政府関係者は以下のように自信をもって言っていた。

「1980年国勢調査結果では確かに数字の操作がなされた。つまりメキシコ南部地域での調査漏れ、いやむしろ恣意的なのか、それとも怠慢からか調査されなかった地域があったという。そこでこの欠落した数字の辻つま合わせを、中央地域(主に、連邦区、プエブラ州そしてベラクルス州)でおこなったという(つまりところは予算獲得のためであったのだが)。この操作数字は400万(当初は300万と言われていたのだが)にも上ったという。その配分比は2:1:1というから連邦区には人口200万が加えられたことになる。そしてこれらの操作をしたのは前任者たちであり自分たちではない」。

そこでメキシコ大地震が生きてくる。手ごころを加えたかの数字は地震により瓦礫の下に葬られ、いまさら修正するにもその手だてはなし、それ以上にその責任をとる人も地震とともに去りぬと言

うわけだ。そんなこんなで80年調査結果はメキシコでは今や非常に肩身の狭い状況にあり、筋金入りの人口専門家は完全にこれらのデータを毛嫌いして使用しないか、あるいは何らかの手を加えている。しかし高度な技術でこの手ごころ数字を自分で修正できる人はいいが、できない人はどうするか。使うしかない。当方も、自信(地震?)満々に「自分だったら数字を操作するなんてそんな馬鹿なことはしなかった」——(そう、10年経てば暴露されるのだし)——と喋った現政府職員某氏の顔を思い、この80年調査結果を利用させていただいている。それにしてもなんと人騒がせな過失。

(付記) 本稿は1991~93年度海外派遣員の調査研究課題報告の一部である。

(あいはら・よしえ/統計調査部)